

ある外国につながる子どもへの高校受験支援の事例研究

—地域・家庭・学校との連携を目指して—

田口香奈恵（東海大学）

1. 研究の背景と目的

高校進学は子ども達にとってその後の進路を選択する上で不可欠なステップとなっているが、外国につながる子ども達の場合、様々な要因で日本人生徒と同じように高校進学を目指すことは容易くない。そこで、行政や学校が行き届かないサポートを地域の学習支援教室が補填し、彼らの背景や特質を把握しながら進路選択へ導いている（乾、2013）。また、乾（2013）は学校が地域とともにネットワークをつくることが重要であると指摘している。

筆者は小規模なボランティア団体の一員として、外国人散在地域のある地方都市の公民館において、外国につながる子ども達を対象にした学習支援教室に携わっている。その中に高校入学者選抜に挑んだ中学3年生がいた。本研究は、その受験生の進路決定に至るまでの過程、地域支援者による受験生・家庭、中学校に対する働きかけを明らかにし、進路選択を促進させた要因を地域支援の視点から探ることを目的とする。また、地域における事例を一連の流れとして詳細に記述することで、地域・家庭・学校との連携づくりへの示唆を得たい。

2. 研究方法

本研究は「現場生成型研究」の立場を取り、筆者が現場に「参加（野津、2016:83）」した際に記録したフィールドノート、当時の出来事、支援者と筆者との間で交わされたメールの内容を分析資料として用いる。また、受験生の進路選択・進路支援に直接的に関わった人々に実施したインタビューも研究データとする。具体的には、受験生 S とその保護者（以下、父親）、中学校の担任教員・学年主任教員（以下、中学校）、地域の学習支援教室に携わる支援者2名（以下、支援者 A、B）の計6名である。インタビューでは当時を振り返りながら進路支援・進路選択での困難さや解決法、当時の気持ちなどについて聞いた。以上のデータの扱いはすべて同意を得ている。

3. 結果・考察

3.1 進路決定に至るまでの出来事：支援者による働きかけ

表1は、志望校決定までの支援者による主な出来事を時系列に3期に分けて示したものである。これらは支援者 A を中心に行われた。高校見学は支援者 A の呼びかけで大学生も毎回同行した。

表1 進路決定までの支援者による主な出来事

志望校未定期	志望校選択期	志望校決定・入試期
6/22 進路についてヒアリング	11/28 父親からの電話相談	1/16 父親からの電話相談
8/27 X 高校見学同行	中学校に電話 12/1 訪問①	中学校に電話 1/18 訪問②
10/10 高校進学ガイダンス勧誘	12/12 S と面談	1月下旬～2月上旬 面接練習
近隣の別施設で学習支援開始	12/16, 17 Y・Z 高校見学同行	2月下旬 入学手続き支援
	父親と面談	
祖父の容態悪化のため 11/27～翌年5月：母子帰国 年末年始約1ヶ月：父親・S・弟一時帰国		

表1の関わり以外に、支援者 B による学習支援が週2回公民館などで進路決定まで継続的に行われた。母親の帰国や父子での一時帰国は、支援者らにとっては予期せぬ出来事だった。

3.2 進路選択を促進させた要因

当初は志望校がなかなか決まらず、11月下旬になっても面接シートは白紙のままだった。支援者 B との学習への取り組みも消極的だった。母親が帰国した 11 月下旬の三者面談直後に父親から支援者 A に対し電話相談が入った。その後、それまで停滞気味だった志望校選択の状況が好転していった。進路選択を促進させた主な理由として以下の 4 点が考えられる。これらは個別で独立した事柄ではなく相互に関連しあって進路選択に影響していた。

① S と支援者の信頼関係の深化：継続的な学習支援を通して、支援者 B は S への態度が変化していった。最初は「普通」に接していたが、母親の帰国で「寂しい」と漏らす S の本音に直面し、「より親身になって優しく接するように」なった。一方で時には「真剣に怒ってみせること」で学習意欲を向上させていた。S も支援者 B の「厳しさが良かった」と語っている。また、支援中のアドバイスが点数の伸びに結びついていくことで、支援者 B は S との「信頼感が増えて行く」実感を得ていた。さらに支援者 B は、地域が果たす役割は学習支援だけではないと判断し、それを実行した。そして地域は中学校と家庭間の「連絡網」にもなり得るのではと考えるようになる。

② 父親と支援者（学習支援教室）との信頼関係構築：父親は日本での仕事や日本人に対して肯定的な評価をしていた。また、本教室が学習支援だけでなく自宅までの送り迎えや母親の悩み相談などに応じていることを「幸せ」に感じていた。さらに、X 高校見学で同行した初対面の支援者 A に、高校受験のシステムがわからず困っていることを伝えている。進路選択期（表 1）には子育てや将来についての迷いも話している。それに対し支援者 A は、父親の「本音」に応えるために、「適切な情報」を与え「選択肢を広げる」ことを意識して支援し、最終的には S 本人が「自分で決め」られるように導いている。

③ [父親→支援者→中学校] の繋がり：父親は、三者面談後に支援者 A に電話で面談結果を報告しようとしたが、内容を正確に伝えられないと感じていた。そこで、支援者 A は父親の代わりに中学校訪問を申し出、父親から承諾を得た。父親はその旨を中学に伝え、中学校がそれを受容した。中学校は面談内容がどこまで正確に父親に伝わったか不安を感じており、支援者 A が家庭と中学校を繋いだ点について「非常に助かった」と話している。

④ 高校見学への誘いと同行：支援者 A は過去の支援経験から受験生が高校見学に参加することの意義を見出しており、繰り返し S を見学に誘っていた。当初 S は消極的な態度で参加していたが、3 校目 (Z 高) の見学で好印象の先輩と「魅力的」な部活動に出会い、志望校を Z 高に決断した。競争率 1.26 倍の中試験日を迎え、合格を果たした。

4. 地域・家庭・学校の連携づくりへの示唆

地域は学校からの問い合わせに応じるだけでなく、家庭の悩みを聞き取り、それを家庭の承諾を得た上で学校に伝える役割も担える。それは、学校には見えにくい地域の小さな支援活動の存在を学校に示す機会になると同時に、学校の抱える困り感を地域が把握するきっかけにもなり得る。三者のネットワークはこうしたやり取りを通して構築されていくことが示唆された。

【引用文献】

乾美紀 (2013) 「第 10 章外国人児童生徒と高校・大学への接続－3つの NPO・学習支援教室の実践と役割から学ぶ－」松尾知明編著『多文化教育をデザインする 移民時代のモデル構築』勁草書房 pp.189-208

野津隆志 (2016) 「現場生成型の異文化間教育学研究の可能性－現場に根ざし変革を追求する研究とは－」『異文化間教育』43 異文化間教育学会 pp.80-89